

イギリス・マンチェスターで開催された 第24回国際科学史・技術史・医学史会議 (iCHSTM: International Congress of the History of Science, Technology and Medicine in Manchester) 参加報告

月澤美代子

順天堂大学医学部医史学研究室／順天堂大学大学院医学研究科

2013年夏、7月21日から28日にかけて、イギリスのマンチェスターで第24回国際科学史・技術史・医学史会議(iCHSTM: International Congress of the history of science, technology and medicine)が開催された。これは、4年に1回開催される科学史・技術史・医学史関係の、おそらく世界最大規模の国際会議であり、今回の会議では60カ国以上の国々から1800人近くの研究者が集まり、1400近くの演題が口頭発表された。私はこの会議に参加し演題発表を行ってきたが、日本医史学会の方々には会議中出会うことはほとんど無く、会員の方々には比較的馴染みの薄い会議であるように思われる。

この会議は、1928年、イタリアからフランスに亡命したアルド・ミエリ(Aldo Mieli, 1879-1950)とベルギーからアメリカに亡命したジョージ・サートン(George Sarton, 1884-1956)を中心に科学史の国際的なアカデミーが結成された時から始まったという。現在の運営母体は、科学史・科学哲学国際連合の科学史・技術史部門(IUHPS/DHST)と、5大陸に広がる50以上の国ごとに組織された委員会(National Committee)だが、4年ごとに行われる大会の企画・運営は、こうした国際組織と地域の組織委員会(Organizing Committee)の共同で行われる。いわば、科学史・技術史・医学史のオリンピック大会のようなものと考えると、組織の面では、かなり近いイメージを抱ける

と思う。また、会議と言っても全員で一つの会場に集まって丸テーブルを囲んで議論するというのではなく、多くの場合、会場校の大学を中心に一つの都市全体の科学史・技術史・医学史関連施設が何かしらの意味で会場となり、同時進行的に多種多様なプログラムが生まれ、領域やテーマごとに多数の会場で発表・討論が行われる。ただし、オリンピックと異なり予選等があるわけではなく、決められた期日までに発表内容のアブストラクトを提出して運営委員会にアクセプトされれば、基本的には誰でも参加・発表できる。

私が最初にこの国際会議に参加したのは1973年に東京で行われた時であり、あれから40年の歳月が夢幻のように過ぎ去っている。この40年の間に11回の会議が開かれたはずだが、このうち、東京(1973)、エジンバラ(1977)、リエージュ(1997)、ブダペスト(2009)、マンチェスター(2013)とヨーロッパで開かれた会議を中心に、これまで計5回参加してきた。開催地によって、それぞれ特色のある運営が行われてきたが、今回、マンチェスター大学をメイン会場として行われた会議の最大の特色は、医学史(history of medicine)が正式名称に加えられたことだった。これまでの会議でも医学史関連のシンポジウムは組まれており、関連するテーマの発表も多数、報告されていた。例えば、4年前のハンガリー・ブダペストでの会議でも、医学領域の事例を中心にした

表1 iCHSTM2013における‘Discipline’ごとのセッション・テーマ数

Discipline (領域)	number of session theme (セッション・テーマ数)
Mathematics	11
Astronomy	7
Technology and communications	23
Systems, data, automation, computation	7
Measurement	4
Physics and natural philosophy	10
Chemistry and alchemy	5
Earth, geology, climate, oceans	9
Life sciences and natural history	12
Medical and human sciences	33
Ecology and environment	4
Social sciences	3
Philosophy and logic	6

シンポジウム・セッション、さらには、個々に登録されてきた発表を集めて討論セッションが組まれており、私が発表した1800年代以降の医学という討論セッションでは、計20題、世界18カ国からの発表者が参加していた¹⁾。

しかし、今回は、かなり様相が違っていた。ホームページに掲載されたプログラムには、発表者の‘Name’や‘Title’の他に、‘Discipline’、‘Locality’、‘Period’、‘Theme’によって関連する発表が選びだせるような検索機能が付けられていたが、‘Discipline’ごとのセッション数は、表1のようになり、医学史に関連する領域のセッションがずば抜けて多かったことが解る。

ただし、これは、セッション・テーマ名の数であり、発表報告数ではない。例えば、「S027. 前近代アジアにおける医学知識の異文化間伝達 (Cross-cultural transmissions of medical knowledge in pre-modern Asia)」というテーマのセッションは、14:10から17:30までの2つのサブ・セッションで計8題の報告が行われているが、「T170. 医学と植民地主義 (Medicine and colonialism)」というセッションでは、朝9:00から10:30までの1セッション、計3題の報告が行われている。また、医学史、工学史、化学史と明確に分けて論じられた時代は既に過去のものとなっており、上記の区分には、重複してカウントされているものも少なくない。

しかし、そうした状況を考えても、今回、医学史関連の発表は多かった。

今回、正式名称に、医学史 (History of medicine) が加えられ、これだけ多くの医学史関連の発表が行われた背景には、地域の組織委員会の中心であったマンチェスター大学、科学史・技術史・医療史センター (CSTM: Centre of History of Science, Technology and Medicine) の存在がある。イギリスには、長年にわたって医療史研究の支援を行っている助成団体であるウエルカム・トラスト (Wellcome Trust) があるが、マンチェスター大学は、このウエルカム・トラストの支援を受けて1986年にCSTMを設立し、科学史・技術史・医療史を統合する視点と問題意識のもとに積極的な教育・研究活動を行ってきた。日本から留学した保明綾さんを始めとした優秀な研究者が、このCSTMから育っており、今回も、シンポジウム・セッションのオーガナイザーや、エクスカージョン、ソーシャル・プログラムの企画実行者として、それぞれ、中心的な役割を果たしている。

さらに、BSHS (イギリス科学史学会) の存在も見逃せない。今回の会議は、このBSHSの全面的な支援と協力を得て行われたが、若い頃、ウィリアム・ハーヴィーを中心にイギリス生理学史の研究をおこなってきた私は、いやと言うほどイギリスにおける学問研究そのものの蓄積の厚みを思い

知らされてきている。今回、そのBSHSの底力というか、科学史・技術史・医学史領域の専門家集団の層の厚さを見せつけられたような、見事な学会運営ぶりだった。これまで、この国際会議での発表内容は「玉石混淆」との評価を受けることが多かった。たしかに、リエージュや、前回のブダペストの学会では、それを強く感じた。しかし、今回、少なくとも私が聴講したセッションでの発表は、ほとんどが充実した内容のものだった。1人だけ「何年に誰が何をしました」的な発表をした演者がいたが、座長から、論点と自分の発表のオリジナリティを明確にするようにとの注意を受け、途中で発表を打ち切られていた。1人の発表時間は、およそ、25分から30分。シンポジウムの申し込み締め切りは、会議の1年以上前の2012年4月30日、個々の研究者が登録するスタンド・アローン発表の締め切りは11月30日であり、3ヶ月後にアクセプト／リジェクトの連絡があった。発表申し込みの条件の1つは「共同発表者を含めて発表者は必ず会場に来て口演発表すること」であり、アクセプト後も、発表の取り下げをした途端にホームページ上からアブストラクトが削除されていた。シンポジウムでの発表はもちろんだが、スタンド・アローン発表も、生物学史、化学史といった領域毎ではなく、発表の論点や中心テーマ毎にセッションに分けられていた。ブダペストの会議では、座長がセッション内の演者からとりあえず選ばれることもあったが、今回は、それぞれのテーマ分野を国際的にリードしているような気鋭の研究者が組織委員会によって選定され、座長として各セッションを積極的にオーガナイズしていた。

ところで、歴史研究としては、テーマと共に、どの時代を研究対象とするかが極めて重要である。近年の科学史・技術史・医学史研究の国際的な動向としては、20世紀を中心とした近現代を対象とした研究が盛んになっていることだが、このマンチェスターの会議でも、その傾向は極めて強かった。今回の会議では、‘Pre-modern’、‘Early modern’、‘Long eighteenth century’、‘Long nineteenth century’、‘Twentieth century and contemporary

history’ という時代区分が使用されていたが、圧倒的に、‘Twentieth century and contemporary history’ に分類される発表が多かった。

トマス・クーン (Thomas Kuhn, 1922–1996) が講演を行った1973年の東京での国際会議や、イギリス史の泰斗トレバー・ローパー (Trevor Roper, 1914–2003) が基調講演をおこなったエジンバラの会議において、「科学革命」‘scientific revolution’ の語の使用の是非をめぐる16～17世紀の事例を中心に熱い議論が交わされていたことが懐かしく思い出されるが、これには大きく2つの理由が考えられる。1つは、例えば、‘Early modern’ を扱う科学史・医学史家たちが、より専門分化を遂げ、個別の一層専門性の高い議論をかかわすことのできる独立した小グループを形成して活動を進めていること。もう1つは、科学史・技術史・医学史研究を取り巻く、より大きな世界的な潮流である。

かつて、ドイツの大学の医学部には医学史の講座が必ずと言ってよいくらい設定されていた。しかし、それは既に過去のこととなっている。国立大学の経営にも独立採算性が求められるようになって以来、専門職として科学史・技術史・医学史を専攻する場合、その研究内容の社会的有用性が常に問われようになった。大学などの研究組織に属する研究者の場合、科学研究費や公的な競争的資金を得て研究することが多いが、獲得のための競争は熾烈であり、研究内容の学問的な価値ばかりでなく、研究成果をいかに社会に還元していくかを具体的に示すことが求められる。医療倫理や、優生学、ジェンダー、あるいは、ヒトゲノム・プロジェクトとともに激変した薬品業界の研究状況、さらには、科学・技術の社会的な還元に関わる医療啓蒙・医学教育や一般大衆への科学・医療情報伝達、あるいは、博物館や資料館の活動、科学技術政策の立案に寄与する医療政策などといった現代の課題に直結するテーマ設定が近年多く見られる理由が、ここにある。

私がこの国際会議に参加してきた間に、私自身の置かれた状況は大きく変わったが、国際社会も科学史・技術史・医学史を取り巻く状況も大きく

変わり、また、開催地により、それぞれ特色のある大会が行われてきた。しかし、変わらないことが1つある。それは、いつの会議においても、活気を与えていたのは、これからの時代を担う若い研究者たちだったということである。1973年の東京での会議に参加した後、東工大や東大を中心に科学史・技術史・医学史の研究活動を行ってきた若き日の私たちは、エジンバラでの会議までの4年間に働いてせっせとお金を貯め、皆で、国際会議への参加を兼ねた初めてのヨーロッパ科学史・技術史・医学史関連施設めぐりを企画した。当時、日本でも科学史研究は盛んであり、総勢20人くらいの研究職を志す若者がエジンバラ入りしたが、私を含む8人のグループは、パリのコンセルヴァトワールや、パドヴァの解剖学教室、マンチェスターの科学産業博物館のワット蒸気機関の調速器などをそれぞれ心に思い描いて、パリのドゴール空港に降り立った。皆、頭の中に知識だけは沢山詰め込んでいたが、初めての海外旅行、初めての飛行機で緊張していた。私たちの頼みの綱は、パリ大学に留学中の先輩であり、パリ市内見物の案内と、あわよくば、美味しいフランス料理をごちそうになれるかと期待していた。しかし、待っていたのは厳しいお説教だった。「冗談じゃない。学会前に見物なんかにつき合っている暇など無い。科学史・医学史の研究職を志すなら、なぜ、まっすぐエジンバラに行って発表しないのだ。発表せず参加だけしようなんて考えられない。学会で発表する連中は、今、世界中で、命懸けで夜も寝ないで自分の発表内容を磨きあげているところだ。趣味で研究している奴らの相手している暇なんてない」。さらに打ちのめされたのは、会議場で自分たちと同年代のヨーロッパやアメリカの大学院生たちが、堂々とした発表をしていたことだった。彼らに語学力の面でハンデが無いことは確かだが、それ以上に打ちのめされたのは、いわゆる大家の説に対して、国際会議の場で、真正面から論争を挑んでいく姿勢と研究内容そのもののレベルと完成度の高さである。

あの時一緒に出かけた仲間たちのほとんどは、先輩の言葉を胸に刻み込み、文字通りの艱難辛苦

の末に研鑽を重ねて研究職に就き、あの時、見事な発表をした海外の大学院生たちは、それぞれ科学史・技術史・医学史領域で誰でも名を知る存在となり、時代の移り変わりとともに、その弟子の弟子のような若い学生たちが、マンチェスターで、自分の存在を懸けた発表を、今また、必死で行っている。感無量の気分である。

最近、日本医史学会でも、若い大学院生たちの充実した発表が聞かれるようになった。しかし、彼らのほとんどはきわめて優等生的態度に終始しており、学術集会の場で、若手大学院生が積極的に質問したり発言したりする場面に出会うことは稀である。自国語で出来ないことが英語なら出来るとは到底思えない。キャリアや立場にこだわらない自由で開かれた議論の場の保証と、「通説」や「思い込み」に対する「批判」のスタンス。新しい研究分野やテーマへの果敢な挑戦。こうした姿勢を失っては、科学史・医学史は、その存在意義を失ってしまう。もちろん、その根底には、日々の絶え間ない研鑽が必要であり、知らないことをやみくもに質問すれば良いというものではないが、

今回のマンチェスターでの会議の収穫の一つは、海外の研究者たちの素晴らしく迫りに満ちた発表を聴くことができたとともに、海外の大学院に留学している医学史専攻の日本人学生たちや研究職志望の大学生、あるいは、既に教育スタッフとして海外の大学で活躍している気鋭の研究者たちと多数会えたことである。

また、会場受付で受け取るのが、ぶ厚い「予稿集」ではなく、USBメモリとWi-Fi接続用のIDとパスワードという、ITを駆使した新しい学会運営の形や、シンポジウム・討論各セッションでの高度にアカデミックな議論とともに、マンチェスター科学産業博物館のアーキビストとの対話や、世界第三の解像度を誇る電波望遠鏡をもつジョドレル・バンク天文台の見学会、コンピューター開発の先駆となったアラン・チューリング(Alan M. Turing, 1912-1954)の'Turing Machine'を題材としたオペラの上演など一般市民も参加可能な多様なイベントやエクスカージョンの企画など、

学ぶことは極めて多かった。

なお、私が編集長をつとめている日本科学史学会生物学史分科会の機関誌『生物学史研究』のVol. 89には、マンチェスター国際会議に参加した若い大学院生や学部学生を含む7名の寄稿文を集めた「特集」を掲載している²⁾。ここには、今回の会議のサブ・オーガナイザーをつとめ、ITを駆使した新しい学会運営の形を実現させた立役者、マンチェスター大学のジェームス・サムナー博士へのインタビューや、多様な側面から今回の会議の様子を描き出した参加者たちの切れ味の良い報告が満載されている³⁾。また、日本科学史学会では、広く参加者のレポートを集めた報告記を編纂中である。合わせてご覧いただきたい。

4年後には、ブラジルのリオデジャネイロで南アメリカ大陸初のiCHSTM、あるいは、ICHSTが開催されるが、そろそろ、また日本で開いてはど

うかという声も出ていると聞く。8年後、あるいは、12年後に世界がどうなり、どのような課題が科学史・技術史・医学史に課せられているかは解らないが、研究職を志す若い皆さんの研鑽と成長に心から期待して筆を擱きたい。

注

- 1) 月澤美代子. 第23回国際科学史・技術史会議（ブダペスト）参加報告—医学史関係の発表を中心に—. 生物学史研究 2010; 83: 69–72
- 2) 月澤美代子, 保明綾, 藤本大士他. 第24回国際科学史・技術史・医学史会議（マンチェスター）参加報告. 生物学史研究 2013; 89: 59–113
- 3) 私が、この「報告」に書いた内容には、『生物学史研究』の特集を編集する過程で若い寄稿者たちから学んだ新しい知識が多く含まれていることを謝意とともに記しておきたい。